

# イギリス帝国と女性：女子高等教育の整備過程をめぐって

著者	並河 葉子
雑誌名	神戸市外国語大学外国学研究
巻	66
ページ	43-52
発行年	2007-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00000614/">http://id.nii.ac.jp/1085/00000614/</a>



# イギリス帝国と女性

## 女子高等教育の整備過程をめぐって

並 河 葉 子

### 1 序

1851年に行われた国勢調査の結果は、イギリス国民に少なからず衝撃をもって受け止められた。すなわち、未婚の女性の数が男性を大量に上回っている事実が明らかになったからである。男女はほぼ同数であるはずなのに、未婚女性の数だけが未婚男性よりも多いというのはいかにも不自然である。しかし、この点にはここでは触れない。問題は、女性が未婚であることが一種の社会問題として取り上げられることになった事実である。

イギリスのヴィクトリア期に理想とされた家族のあり方の特徴は、「働かない（有給雇用に従事しない）妻」と家族のなかでの役割が必ずしも明確ではない、言い換えれば家庭のなかで妻に比べて明らかに「存在の希薄な父親」という男女の対照である。

当時は、よき妻、賢い母として家庭を切り盛りすることこそが女性の役割であるとの「ドメスティック・イデオロギー」が支配していた。大量の未婚女性の存在を明らかにした調査結果は、自身が女主人として切り盛りする「家庭」という、女性にとってふさわしいとされる居場所をもてない女性たちにどのように対処すべきなのかという問題を社会が放置する余地はもはやないことを如実に語っていた。後述するように、これを一つの契機にして、それまで停滞していた女子の高等教育が前進をみる。

しかし、イギリスは歴史的に成人の未婚率が高いことが一つの特色であった。それにもかかわらず、この時期に未婚の女性の存在がにわかにクローズアップされたのは、特有のジェンダー観の成立という時代背景によるところが大きい<sup>1</sup>。一定の階層より上の女性たちは有給雇用に従事すべきではない

---

1 ヨーロッパの家族制度を知るうえで重要なものに「ヘイナル・ライン」がある。これは、ヘイナルが指摘したヨーロッパの東西を地理的に分離する境界のことであ

との価値観が社会を覆っていた時代にあって、自活せざるを得ない女性たちにはガヴァネスをはじめとしたきわめて限定された、また非常に不安定な職域に殺到した未婚の女性の問題とは、彼女たちの困窮をどのように救済してゆくのかという、すぐれて経済的な問題と直結していたため、社会問題の様相を呈することになったのである。

## 2 「近代的ジェンダー・ロール」の確立

ヴィクトリア期の女性には「家庭の天使」として妻・母としての役割が強く期待されていた。有給雇用から締め出され、「家庭」で家族の「ケア」を取り仕切る役割を付された女性たちが「家庭」の外で見出した活動の場も経済および政治活動とは切り離されたヴォランティアな博愛主義的社会改良運動であり、ワーキング・クラスの生活改善や海外伝道活動の支援などが主であっ

た<sup>2</sup>。

しかし、このようなジェンダー・ロールは伝統的なものではなく、ある時期に歴史的に形成されてきたものである。イギリスについては、18世紀の工業化が引き起こした社会変革の影響を無視することはできない<sup>3</sup>。社会の

---

る。この境界は西方のカトリック地域とギリシャ正教など東方教会が主流の地域という具合にヨーロッパを宗教的に二分するものであるが、東西で異なるのはじつは宗教だけではないことが彼によって明らかにされた。

つまり、「早婚・皆婚・複合家族」を特色とする東ヨーロッパの家族パターンとは対照的に、西ヨーロッパは地域的な差異がみられるとはいえ、歴史的に「晩婚・高い生涯未婚率・単婚核家族」が家族の基本的特徴となってきた。これを「ヨーロッパ型結婚」と呼んでいる。

18世紀から19世紀にかけてもイギリスにおける平均初婚年齢は男女ともに20歳代半ばであり、決して早いとはいえない。1871年に行われた中流以上の階層を対象とした調査によれば1840年から70年にかけての平均初婚年齢は男性29.95歳、女性25.53歳であった。加えて、生涯未婚率もきわめて高く、

ただし、統計的にみて独居老人が極めて少なく、1851年統計によれば男女ともに1割にも満たないことも注目に値する。これは、結局のところ、老親の世話を未婚の娘たちが引き受けていたことを示唆している。

2 Prochaska, *Women and Philanthropy in Nineteenth Century England*, Oxford, 1980.

3 松浦京子「不可視化された既婚女性労働ーイギリス女性労働史を考えるにあたって」、河村貞枝他編『イギリス近代女性史研究入門』、青木書店、2006年、144-157頁。

工業化にともなう都市化のなかで表出してきた問題に対応すべく18世紀後半から19世紀にかけて諸改革が進められた。モラル・リフォーム運動ともいわれる改革は刑務所改革運動、日曜学校運動、禁酒運動、動物愛護運動だけではなく、反奴隷制運動や海外キリスト教伝道運動など国内外を問わず幅広い分野に及ぶ。

ただし、一連の改革で中心的な役割を果たした人びとは重複しており、非国教徒や国教徒であっても非国教徒との連携に柔軟な姿勢を示していたクラパム派と呼ばれる人びとがその中心であった。かれらは、運動の成否を握る鍵として「家庭」の役割をつねに重視しており、国内外でかれらの理想とする「家庭像」の普及に精力を注いだ。

18世紀末からのモラル・リフォーム運動は、しばしば指摘されるフランス革命への対抗という政治的かつ宗教的背景や、あらたな階層であるミドル・クラスの出現の影響だけでなく、イギリスの工業化や都市化にともなう社会の変革による生活様式の具体的な変化などを考慮する必要がある。なかでも都市化により、あらゆる階層で職住の分離が進んだ近代という時代の入り口で、家庭における父親の不在が決定的なものになっていくという事実が、続くヴィクトリア期のモラルの基盤形成に与えた意味は極めて大きいといえよう。

また、社会上層部のきわめて限られた階級にのみみられた「働かない」女性像が理想的な家族像として18世紀末からヴィクトリア期にクラスを超えて社会に定着したのは、ひとえにモラル・リフォームを推進したクラパム派そのものが、イギリスの工業化と同時に勃興してきた新しい都市生活者であって、伝統的な支配階層とは一線を画する新興のミドル・クラスの象徴的存在であったことによる。

刑務所改革や反奴隷制運動などを含む一連の改革を牽引したクラパム・セクトのメンバーは、婚姻によって複雑に縁戚関係を結んでいた<sup>4</sup>。クラパム派のメンバーは表舞台で活動する男性たちだけでなく、その妻たちも積極的に運動に関与していた。各改革を推進するにあたっては、たとえば「奴隷貿易廃止委員会」など、個別の目的に応じた組織が各地に立ち上げられたが、

---

4 並河葉子「聖者たちと奴隷解放」川北稔編『結社のイギリス史』、山川出版社、2005年。

表舞台では男性が独占していたこのような委員会でも、活動資金を実質的に集めていたのは女性たちであることが多かった<sup>5</sup>。また、女性たちは独自に組織を立ち上げ、男性たちの活動方針とは異なる独自の理念を掲げて積極的かつ自律的に活動を展開していた。ヴィクトリア期には貧困層への慈善活動や労働者階級に対する家庭訪問を通じた生活改善指導などのヴォランティアな活動がミドル・クラス以上の女性たちにとってのなかば義務となっていくが、モラル・リフォーム期の改革運動にすでにその萌芽がはっきりとみてとれる。

### 3 女性宣教師と教育：「近代的ジェンダー・ロール」の世界化

ヴィクトリア期イギリスで確固たる地位を築いた家族モデルは、国内だけでなく海外でも近代的な家族モデルのグローバル・スタンダードとして不動の地位を確保することになる。この観念のイギリス内外での普及過程には、女子教育のあり方が大きく関わっているが、なかでも海外ではというのも、彼女たちの役割は、多くの場合、実質的には「教師」としてのものであったからである。海を渡った女性宣教師たちの果たした役割が大きかった。

18世紀末のモラル・リフォーム運動の延長上に18世紀末から19世紀の世紀転換期にイギリスでは数多くのキリスト教海外伝道協会が設立される。イギリスの伝道協会はプロテスタント系であったため、独身の修道士や修道女が伝道活動にあたるカトリックの伝道協会とは異なり、夫婦を基本軸として家族で活動するのが一般的であった。

男性宣教師の妻も布教現場で女性や子どもを対象に基礎的な読み書き教育や育児・保健知識の指導などに積極的にあたることになった。女性宣教師は1870年代まではきわめて限られた存在であったし、女性宣教師の場合は独身であることが絶対条件であったために、彼女たちが任地で同僚の宣教師と結婚して宣教師の身分を離れ、宣教師の妻として実質的にはそれまでの活動を継続する例も多かった。

これは、女性宣教師たちが海外のミッション活動のなかで一夫一婦制に基

---

5 Midgley, Clare, *Women against Slavery: the British Campaigns 1780-1870*, London, 1992, ch.2.

づく家族制度を普遍的なモデルとして普及させることに大きな貢献をしたこと、および彼女たち自身が家族のなかでの理想の女性を生きるロール・モデルとしての役割を期待されていたことを示している<sup>6</sup>。

女性宣教師を専門に派遣する先駆けである東洋女性教育協会は1831年に設立されるが、この団体は「教師」として女性宣教師を海外に派遣していた。ここに象徴されるように、女性たちは宣教師の肩書きをもちながら、実際には教師や医師、看護師といった非宗教的分野での活動に従事していた。また、専門職ではあってもかのじょたちに期待されたのはあくまでも女性としての特性を生かした仕事であり、たとえば医師であっても女性あるいは子どもたちを対象とするものに限定されていた。男性の活動分野との競合、重複を避けることも大きな焦点であった。

基本的な読み書き算数を教える段階の初等教育では男女の教育内容にさほど違いは見られなかったとはいえ、中等教育レベルになると教育現場でも男女のカリキュラムにははっきりとした違いが現れる。聖職者や現地政府の官僚などの養成が最終的な目的となっていた男子の場合と異なり、女子教育では家政学が重視され、洋裁や手芸などの科目がなかった。

キリスト教ミッションが非ヨーロッパ世界で活動するさい、現地の社会ともっとも頻繁に衝突したのは家族制度の問題であった。宣教師たちは一夫多妻や幼児婚などを克服すべき野蛮の象徴にとらえ、一夫一婦制の普及をめざしたが、女子教育はそのための重要な手段の一つであった。

女子中等教育では非ヨーロッパ世界の女子の教員養成も大きな目的の一つであったが、男性の領域との明確な棲み分けが意識されている。ケニアにおいては、女子教育について、「男性教師の領域との重複避けるため、女子学生たちには幼児教育の専門家として幼稚園教員としての訓練を行うか、裁縫、手芸や基本的な看護教育を行う」と述べられている<sup>7</sup>。ただし、男女の教育

6 並河葉子、「女性宣教師の帝国」『空間のイギリス史』、山川出版社、2005年。

7 Kenya National Archives CMS 1/382, quoted in Tabitha Kanogo, 'Mission Impact on Women in Colonial Kenya', *Women and Missionaries*, p.182.

Jane Haggis, "A Heart that has felt the love of God and longs for others know it": conventions of gender, tensions of self and constructions of difference in offering to be a lady missionary' *Women History Review*, Vol.7, No.2, 1998.

目的に明確な差異があったのは戦間期までのイギリスにおいても同様であり、海外のミッション現場における特殊な事情ではない。

ところで女性宣教師が増加し始めた1860年代から70年代というのは、女性たちが宣教師として本格的に採用されるようになった時期であるが、これは同時にイギリス本国で女性たちにも医師、看護師、教師などへの専門的な教育の門戸が開放され始めたころと重なる。この決定の背景には海外のミッション現場からの要請があったことが大きい。すなわちインド、中国およびイスラム圏では女性たちは家族以外の男性との接触が厳しく制限されているために男性の医師の診察を受けることが出来ないばかりでなく、学校に行くことも困難であるため、女性たちが医師や教師として医療活動や教育に携わることがインドや中国の女性たちのために必要であるとの報告が相次いだのである。

イギリスの場合、大学が医学部に女子学生を受け入れるのは1869年のエディンバラ大学が最初であった。しかも、このとき入学を許可された二人の女性は入学を許可されたものの大学側がこの決定を後に覆したために卒業できず、国外で医学教育を修了せざるを得なかった<sup>8</sup>。エディス・ペイシーとソフィア・ジェックス・ブレイクはベルンで医学教育を終えた。彼女たちは、女性にたいする医学教育の門戸開放をもとめてエディンバラ大学を相手取って訴訟を起こした。裁判では負けたものの、これをきっかけに女性にたいする医学教育の是非をめぐってイギリスでは大きな論争が起きた。女医養成の必要性を訴えるインドなどの宣教師たちからの報告はロンドン女子医学校の開校に結実することになる。この学校は、とくにインドの高い階層の女性たちに適切な医療を提供する人材を養成することが大きな目的となっており、1874年10月に入学した14名の一期生にはすでにインドで宣教師として活動していた女性が含まれている。

イギリスで女医として教育を受けた人びとは国内に活躍の場がなく、ほとんどが宣教師として海外にわたることになった。エディス・ペイシーも例外ではない。エディスは1883年にインドわたり、カーマ女性子ども病院の主

---

8 イギリスにおける女性医師誕生の経緯については香川せつ子「医学と女子高等教育の相克—ヴィクトリア期における「女性の身体」—」、望田幸男他編、『医療と身体教育社会史』、昭和堂、2003年、258—285頁参照。

任医務官としての職についた。彼女は1885年、インド人女性に対する医学教育推進を目的に設けられたダフリン伯爵夫人基金創設にさいしても尽力し、インド人女性医師を後進として育成することにも力を注いだ。

一方、インドにおけるインド人に対する西洋医学教育は1830年代にはすでに開始されていたが、ここでも女性が受け入れられるようになるのは19世紀後半になってからである。

イギリスで女性に医学教育を解放するか否かの論争が続いていた1874年、マドラス医学校は3年制のコースに5人の女子学生を入学させた。続いて1835年に開校したカルカッタ医学校は1883年、ベンガル地方で最初に女子学生の受け入れを決定した。1887年にはキャンベル医学校が病院でのアシスタントとして女性を訓練し始めた。女性にたいする医学教育の第一歩はほぼ同時に開始されたのである<sup>9</sup>。

女子教員養成課程の整備についても1866年から67年にかけてインドに滞在したメアリ・カーペンターの報告が前進のきっかけになった。

19世紀前半からすでに女性宣教師を教師として派遣する事業が行われていたことはすでに述べたが、19世紀のあいだイギリス本国においては女性教師よりもガヴァネスが職業としては需要も多く一般的であった。また、ヴィクトリア時代、イギリス本国で職を得ることのできなかつたガヴァネスの多くが海を渡ってオーストラリアなど白人入植者の多いホワイトコロニーへと向かったことはよく知られている。ガヴァネスはレディであることが絶対条件であったから、ガヴァネスになるための教育というのはすなわちレディとしての素養を身につけるために「家庭性」を重視し、たしなみの習得が基本となっていた中流階級の女子の一般的な教育と同一であり、特別な「職業教育」というのは存在しなかつた。レディたるガヴァネスは専門的知識を備えたプロフェッションとは両立しない概念であったからである<sup>10</sup>。これは、19

---

9 Geraldine Forbes, 'Medical Careers and Health Care for Indian Women: patterns of control', *Women's History Review*, Vol.3, No.4, 1994.

10 山口みどり氏によれば19世紀半ば、ガヴァネスの困窮の背景には低い教育水準とジェンティリティへの固執があるとみてガヴァネス職をプロフェッションとして確立し、救済することを目標に1847年クィーンズ・カレッジが開校した。しかし、翌年には女子一般にたいする教育へと軌道修正がはかられ、夜間コースにおけるガ



世紀前半という早い時期に教師が専門職として認知され始め、女性教師養成が進んだアメリカとは大きく異なっている<sup>11</sup>。

また、19世紀をつうじて学校ではなく家庭を仕事場とするガヴァネスに相当の需要があったということは、家庭教育が初等教育の場として重要な位置を占めていたことを示している。イギリスにおいてレスpekタブルな階層の子どもたちに対する初等教育機関として「学校」が不可欠なものと社会的にも認知され始めるのは19世紀末であり、非ヨーロッパ世界の事情と比べてもけして早くはない。19世紀半ば以後、初等教育を終えた段階で男子はパブリック・スクールに入ることが中流階級では一般化し、それに引き続いて19世紀後半以後大学入学者の急増をみる。女子教育は、第1次世界大戦期までほとんどの場合は家庭においてなされ、学校に通う場合も教育内容はあくまでも「家庭性」の体得が重視されていた。家庭生活こそが女子教育であるとされたため、女子教育では寄宿学校ではなく通学制が好まれ、授業は原則として午前中のみであった<sup>12</sup>。一方、望ましい家庭を欠くとされた植民地では、女性たちを母親にかわって教育するために教師としての女性宣教師たちや、寄宿制の学校が必要とされたのである。つまり、女性教師を専門職として育成するための素地はイギリス国内にはほとんど存在しなかったといつてよい。

#### 4 むすびにかえて

日本でちょうど明治維新前後の社会の大変革期にあたる1870年代というのは、女子教育の現場で世界的に大きな変化が起きた時代でもある。イギリスでは非ヨーロッパ世界における需要を理由に頑迷な男性たちが独占してきた医師への道が女性に解放されるのをはじめとして教職や看護、保健・衛生

---

ヴァネスの再教育などガヴァネスを念頭においた教育や制度も1850年代半ばまでには消滅する。1860年代になるとガヴァネスの「職業教育」は完全に否定されるにいたり、当初の理念は結局定着しなかった。山口みどり「ヴィクトリア時代のガヴァネスと女子教育改革」、『三田学会雑誌』89巻2号、1996年7月、165-167頁。

11 佐久間亜紀「19世紀米国における教師教育成立の一系譜—エマ・ウィラードのトロイ女子セミナリーに着目して—」、『教育学研究』、第67巻第3号、333-343頁。

12 河村貞枝、『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』、明石書店、2001年、243-248頁。非ヨーロッパ世界では「家庭性」を体得させるためにこそ寄宿学校が必要であるとされたことと、その教育にあたる女性宣教師たちにレディであることが求められた非ヨーロッパ世界と好対照を成している。

など女性の特性に合致するとされてきた分野で養成課程や資格の整備が進み、職業として社会的に広く認知され、一定の地位を確立し始める。

男性に限れば欧米の医学教育が日本に数歩先んじていたことは確かである。しかし、ここでみてきたように、女性に目を向ければ、医師として正式な職業訓練を受け、資格をもつようになった女性たちは日本でいえば明治維新後に初めて誕生する。かのじょたちは本国ではなく非ヨーロッパ世界ではじめて能力を生かす機会を得ることができ、医師として診療にあたるだけでなく、現地女性たちを後継者として積極的に育成しようとした。つまり、ヨーロッパと非ヨーロッパ世界において女性の専門職教育はほぼ同時進行していたといっても過言ではない。

少なくとも19世紀なかばまでイギリス国内のミドル・クラス以上の子どもたちの初等教育は家庭内でガヴァネスによって行われていた。つまり、学校そのものをすべての子どもたちが通わなければならない教育機関として位置づけ、学校教師を専門職として養成する取り組みもアメリカなどに比べて明らかに遅れていた。ただし、「帝国」の存在を前提に、女性宣教師養成が教師養成としての機能を帯び、「帝国」の具体的需要を背景に「教師」養成が行われていた。「帝国」という装置を介して女性たちには専門職教育を受ける道が開けたばかりではなく、それまでイギリス本国では認知されていなかった分野において学校をとおした教育・訓練の場が女性たちに提供されるようになったのである。

「女性から女性へ」をキーワードに教師や医師、看護師として最先端の専門知識と資格を得たヨーロッパ人女性宣教師たちは、19世紀後半非ヨーロッパ世界にヨーロッパ近代的な知識を伝えると同時にその基盤となるヨーロッパ的価値観をも普及させた。ヨーロッパ近代的な知識・教育体系が正統性を獲得し、その価値観が普遍的なものとしての位置づけ獲得するうえで非ヨーロッパ世界にミッションが展開した学校、とくに女子教育の場は重要であったが、これはひるがえってみれば非ヨーロッパ的な家族のあり方、価値観の周縁化にはかならなかった。19世紀の間、イギリス系のプロテスタント伝道協会における女性宣教師の採用がほぼヨーロッパ系に限られていたこと、女性たちの採用にあたっては学歴や職歴以外にレディとしてふさわしいかど

うかが重要な選考のポイントであったことはこれと密接に関連している。ミッション活動にかかわった現地の女性たちの地位が常にヨーロッパ系の女性たちよりも一段低く位置づけられていたこともこれとは無縁ではないだろう。

イギリスやアメリカなど欧米の伝道協会が展開したミッション・スクールの影響ではからずも19世紀後半から20世紀初頭にかけて世界に広がった「学校教育文化」の同時代性、またそこで提示されたヨーロッパ的な価値観のグローバル化がもたらした影響は帝国主義という範疇を超え、時代の文化というべき様相を呈していた。しかしその教育を支えた女性宣教師たちの矛盾した存在のあり方や現地の女性たちの位置づけそのものが、普遍的であるはずの「近代」家族の内包する問題を象徴しているといえるのかもしれない。